

の 夫 工 私

国語科授業のデザイン ～単元構成の工夫とICTの活用～

岡山市立山南学園

教諭 多田 雅登



国語授業において、何を教えたらいいのかわからない。大事とは分かっているけど、中々楽しく授業をすることができない。といった難しさをこれまで感じてきた。国語科の授業作りにおいて大切にしてきたのが、教科書を教材化させることと、ユニバーサルデザイン（以下UD）の視点である。今回紹介する工夫は、全員の子どもたちが少しでも、楽しく、前向きに、知的好奇心をもって国語科の授業に参加するために取り入れてきた工夫である。

工夫① 単元をUDする

①-1 単元の導入（一次）の工夫

導入となる一次の設定は言語活動との出会わせ方や必要感のもたせ方、二次以降の見通しのもたせ方や計画の立て方を工夫した。

①-2 単元の展開（二次・三次）の工夫

国語科において文学的文章や説明的文章の一般的な単元構成は一次から三次へと順を追って進んでいくイメージが強かったが、その

第3学年「すいせんのラップ」

（東京書籍）では、挿絵の並べ替えやセンテンスカードの配置を学習活動に位置付けた。登場人物の挿絵とセンテンスカードを繋げさせて、「誰の会話文かわかったのはなぜか」や、音読をさせてみて、「どうして音読の仕方に違いをつけたのか」といった問いを投げかけ、認知させることで、根拠となる叙述に目を向けさせたり、登場人物の相互関係や心情の読み取りへの見通しをもたせたりすること、二次以降の計画を立てることへとつなげた。



ージの作成（下書き）をする。今回の工夫では、読み取りと下書きを1単位時間の中に設定することで、読み深めた学びを1単位時間内で、そのまま自分の言語活動に生かすことができた。最初は時間のマネジメントが難しかったものの、同じ流れを繰り返した単元構成にすることで、単元を進めるにつれ、子どもも見通しをもってスムーズに取り組むことができるようになっていた。

工夫② 1単位時間をUDする

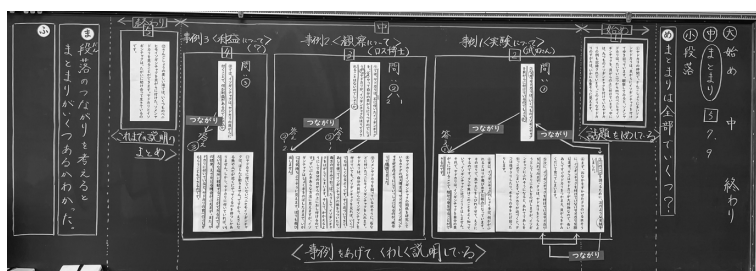
1単位時間をUDするために、授業を大きく4つ（めあて・展開①・展開②・まとめとふりかえり）に分けて構成した。

めあてをもつ場面では、一次において学習計画を立てておくことで、見通しをもってめあてをもつことができるようにする。また、Cam型とLet's型のめあてを使い分けることで、子どもが「できそう」「やってみよう」と思えるよ

うにした。

展開①では、全員が学習に取り組めるような、学習内容を視覚化する学習展開を意識した。読み取る内容を明確にした上でサイドラインを本文に引いたり、事例の数の数値化を個人で考えたりすることで、内容を可視化し、共有できるようにした。

展開②においては、国語科の論理を視覚化し、知的好奇心をもつことができるようにした。センテンスカードの配置や言葉の入れ替え、順序の



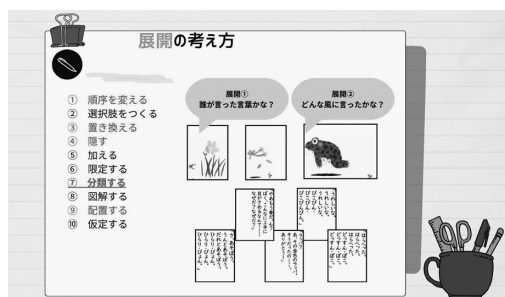
え、順序の検討といった活動をともに、教材を再検討することで、作者の思いや登場人物の相互関係、主題、筆者の主張や事例の意図などといった国語科における見方・考え方を深めることができるようにした。

ることで、全員が1単位時間内における学びの足跡を残すことができるようにした。

工夫③ ICTの活用

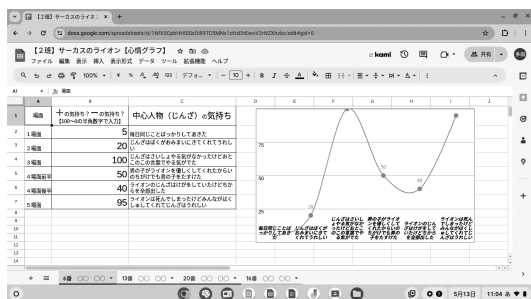
主体的・対話的な学びと、協働的な学びを実現するために、ICTを活用してきた。第3学年「サカスカのライオン」（東京書籍）や第4学年「走れ」（東京書籍）では、登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述をもとに捉えることに合わせて、心情の変化を可視化させるために、スプレッドシートを活用した。

班に1つのスプレッドシートを配り、タブを人数分作成しておく。登場人物の心情を数値で入力



まとめ
とふりか
えりでは、
めあてと
連動させ
るために
書き出し
をそろえ
たり、ふ
りかえり
における
視点を示
したりす

すると、折れ線グラフが自動で作成されるように設定しておくことで、登場人物の心情の変化を一目で理解することができるようにした。数値を変えるとすぐに反映されるため、読みを進めていった上で考えが変わった時などにも変更が容易であった。また、数値の隣にはその数値にした根拠となる叙述を入力させるようにすることで、叙述をもとに捉える力を育むようにした。タブを行き来するだけで、友達



スプレッドシートで設定することができた。説明文でも同様に、第5学年「和の文化を受けつぐ」（東京書籍）において、パンフレットを作成するための構成を入力させ

る場面などで、スプレッドシートを活用することができた。



今回取り上げた工夫は、国語科における授業のみならず、他の教科においても活用している。授業をする上で、うまくいかない場面などは多々あるが、子どもの姿を正確に見取り、授業改善をしていくことで、全員の子どもたちが楽しく、前向きに、知的好奇心をもつてどの授業にも参加できるようにしていきたい。